

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1. 「Living a Global Citizens: An Introduction to Sustainable Development Goals」 (英語テキスト)	共著	2021年4月 (再版：2021年 6月、9月)	出版社：南雲堂	SDGsをテーマにしたコンテンツベースの大学生向けの英語教科書である。貧困、資源利用、差別などのさまざまなグローバル的問題の原因や現状を学びながら、学生が自分との問題との繋がりを考え、各章にあるアクティブラーニングで解決のための個人的取り組みの方法等を見つけていく内容である。(14章・約120ページ+70ページTM) 著者(担当割)：小関一也(50%)、 Kevin McManus(50%)
(著書(和文)) 1. なし				
(学術論文(欧文)) 1. 「Am I Understood?: Passivization and Foregrounding」 (論文) 2. 「Peer Mentoring and Development of Student Agency」 (論文)	共著 共著	2022年3月予定 (査読審査済み、掲載される予定) 2020年8月	日本英語学会学術雑誌「English Linguistics投稿規定」第36-2号(査読付) 全国語学教育会(JALT)第45回国際大会論文集(査読付)	英語表現の「Am I understood?」と「Do you understand?」などの異綴語の意味論的な解析の内容である。表現の受動変形による、脅迫的な利用、発言者の権力のある立場などの意味条件を論じていく。(pp.未定) 著者：Akihiko Sakamoto(60%)、 Kevin McManus(40%) 本研究は、常磐大学でピア・メンタリングの実践において、メンターの自主性の発達を明らかにしようとした試みで、特に下級生を導いた経験が、メンターを務めた学生の自主性にどのような刺激となったのかに焦点をあてた。メンターへのインタビューと下級生とのセッションの記録を、KJ法とKH Coderの共起ネットワークを用いて分析した。結果として、自主性に強く関連する刺激が8項目あることが認められ、自身の言語学習の知識や経験をメンター活動に活かすことで、メンター自身の自主性に影響があることが分かった。 (pp. 409-419) 著者：桑原秀則(70%)、 Kevin McManus(15%) 、渡邊真由美(15%)
(学術論文(和文)) 1. なし				

<p>(紀要論文)</p> <p>1. 「Examining Student Attitudes about Online Communicative Language Tasks: Action research from three university-level EFL courses」 (論文)</p> <p>2. 「Designing a Practical Team-teaching Training Program for Incoming Exchange Students and Students Taking English Education Courses」 (論文)</p>	<p>単著</p> <p>共著</p>	<p>2022年3月予定 (審査済み、掲載される予定)</p> <p>2022年3月予定 (審査中)</p>	<p>常磐大学人間科学部紀要 (第39巻第2号) (紀要委員会による審査付)</p> <p>常磐大学教職センター紀要「教職実践研究」第2号 (紀要委員会による審査付)</p>	<p>本研究では、3つのコミュニケーション英語コースにおいて、2種類のオンライン・コミュニケーション言語タスクに関する学生の態度を調査した。1つ目は、オンライン会議ソフトによる「ライブ」グループディスカッション。2つ目は、「フォーラム形式」のソフトウェア機能を用いた文章による交流である。アンケートの回答を分析し、考察した。(pp. 未定)</p> <p>本研究では、まず、日本の英語教育の現状、英語教師教育のあり方、常磐大学の留学生受入プログラムのあり方を検討する。次に、アンケートから得られた学生のニーズや元学生の反省点を評価した上で、Graves (1996) の「コース開発のためのフレームワーク」を用いて、英語教師教育コースの日本人学生と、将来ALTとして日本で英語を教えたいと考えている外国人留学生を対象とした、チームティーチングに必要なスキルを促進・開発するための新しい実践的な学術コースを提案する。(pp. 未定)</p> <p>著者：<u>Kevin McManus (80%)</u>、桑原秀則 (20%)</p>
<p>3. 「Preliminary Evaluation of the Framework of Tokiwa English Curriculum (FTEC) based on Student Questionnaire Responses: Part One of a Three-part Case Study」 (論文)</p>	<p>共著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>常磐大学人間科学部紀要 (第37巻第2号) (紀要委員会による審査付)</p>	<p>本研究は、常磐大学新英語カリキュラム (FTEC) で実施された授業評価質問紙調査の分析結果報告と提案である。使用された質問紙は、授業運営、担当教員の指導、受講生自身の授業へ対する取り組みに関する評価の3つのパートから構成されており、共通英語を受講する全ての学生を対象とした。全体及び習熟度別における新カリキュラムや指導法に対する学生の反応や、学生自身の学修成果 (語学パフォーマンス) に対する感想などに関して分析が行われ、最後に改善の提案がなされた。(pp. 1-22)</p> <p>著者：<u>Kevin McManus (70%)</u>、桑原秀則 (30%)</p>
<p>4. 常磐大学共通英語カリキュラム (FTEC) - 論理的背景と運用- (研究ノート)</p>	<p>共著</p>	<p>2018年9月</p>	<p>常磐大学人間科学部紀要 (第36巻第2号) (紀要委員会による審査付)</p>	<p>本研究では、常磐大学で2018年度より運用が開始された新英語共通カリキュラムをの基盤になった論理的背景を詳しく述べ、どのように運用・実施がされているかを解説した。(pp. 41-51)</p> <p>著者：森本俊 (70%)、桑原秀則 (10%)、上野真悠子 (10%)、<u>Kevin McManus (10%)</u></p>

<p>5. 「Challenges in Providing Institutional-level TOEFL Support in Japan: A report on the Tokiwa University TOEFL iBT Preparation</p>	<p>単著</p>	<p>2018年 3月</p>	<p>常磐大学教職センター 紀要「教職実践研究」 第2号 (紀要委員会による 審査付)</p>	<p>本研究は、以前の研究の成果に基づいて、本学での全学レベルのTOEFL iBT学習サポートの効果性および長所と短所を検査し、改良するための具体的提案を行った。 (pp. 221-234)</p>
<p>6. 「Investigation on Using the Communicative Approach in Preparing Students for the TOEFL iBT Speaking and Writing Tasks in a Japanese University-based Intensive Study Course」 (論文)</p>	<p>単著</p>	<p>2017年3月</p>	<p>常磐大学教職センター 紀要「教職実践研究」 第1号 (紀要委員会による 審査付)</p>	<p>本研究は、TOEFL iBT試験の集中講座の参加者を対象者とし、伝統的な言語技能の取得に基づいたカリキュラムに、コミュニケーション重視の英語教育 (CLT) の授業方法を加えた場合、どのような効果あるかを調査した。方法として、2週間の集中講座を中心にデータ (講座終了後のアンケート及び模擬試験の点数) 収集を行った。結果として、自由参加の形で行ったCLTの授業に参加した対象者は、スピーキングとライティングの問題への解答に高い自信を示した。また、参加しなかった対象者に比べ、直後の模擬試験で言語技能をより向上させたことが分かった。 (pp. 79~106)</p>
<p>7. 「発音訓練が学習者にもたらす変化：明瞭性 (Intelligibility) の高い英語発音を目指した授業から」 (論文)</p>	<p>共著</p>	<p>2017年3月</p>	<p>常磐大学国際学部研究紀要第21号 (紀要委員会による 審査付)</p>	<p>本研究の目的は、常磐大学の授業科目での英語発音訓練によって、どの程度学習者への明瞭性 (Intelligibility) の効果があるのかを分析し、学習者の英語発音に対する態度を調査することであった。分析方法は、学習者が英語発音訓練を受ける前後で、英文の朗読やリハーサルなしで絵の説明等を行い、その会話を録音したものをネイティブスピーカーが個別に原評価基準にり評価を行った。結果として、ほとんどの学習者の発音が上達し、英語で話すことへの自信が向上し、英語発音の向上に対する練習への動機が高まったことが明らかになった。 (pp. 46-55) 著者：渡邊真由美 (70%)、Kevin McManus (30%)</p>
<p>(辞書・翻訳書等) 1. 「知的障害と認知症一家族のためのガイド」 (英書名：「Intellectual Disabilities and Dementia: A guide for families」) (英→和の翻訳出版物)</p>	<p>共著</p>	<p>2021年4月</p>	<p>出版社：株式会社現代人文社</p>	<p>本書は、知的障害者や認知症の人の家族や介護者に役立つガイドブックを翻訳したものである。翻訳者の中で唯一のネイティブスピーカーである私は、重要な役割を担い、プロジェクト全体に関わった。英語の医療用語に精通していることと、家族に知的障害者がいることから、参加を依頼された。(7章・181ページ) 監訳者：木下大生 (40%)、竹内千仙 (30%)、Kevin McManus (30%) 英語版著者：Karen Watchman</p>

<p>(報告書・会報等)</p> <p>1. 「語学学習に関するアンケート報告書」</p> <p>2. 「Using Pixar Animated Shorts to Supplement ESL/EFL Units on Storytelling」 (査読付英語教育関連記事)</p> <p>3. 「Issues for Providing Institutional Support for the TOEFL iBT」</p> <p>4. 「The Importance of Knowing our Own Culture in Intercultural Communication: Lessons learned from a decade of experience in Japan」</p>	<p>共著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>2018年6月</p> <p>2017年8月</p> <p>2016年11月</p> <p>2016年11月</p>	<p>課題研究費での出版</p> <p>TESOL International Association: Video and Digital Media Interest Section Newsletter (査読付)</p> <p>教育実践学会第24回大会発表要旨集 (2頁)</p> <p>「異文化研究: Cross-cultural Studies」茨城大学教育学部異文化研究会創刊号 (6頁)</p>	<p>本学の課題研究である「Framework of Tokiwa English Curriculum (FTEC) に基づいた共通英語教育カリキュラムの実践と検証」で、必修英語科目を受講する新入生 (全学) のニーズアンケート調査を実施し、その結果を分析し報告書とした。 (pp. 37-49, 55-56) 著者: 森本俊(40%)、桑原秀則(20%)、上野真悠子(20%)、Kevin McManus (20%)</p> <p>本件は、ListeningとSpeakingの英語科目での教材利用に関する実践報告である。具体的に、ネット上の無料で観られるピクサー・アニメーション・スタジオの短編アニメーションを利用しながら、その教材を様々なレッスンに合わせてより有効性の教育をできる方法について報告する。</p> <p>常磐大学における全学レベルのTOEFL iBT受験のための学習支援に関わる現状について、参加学生のアンケート、模擬試験の得点、及びインタビューの結果に基づき、今後の学習支援のあり方に関する発表記録である。特に、TOEFL試験でのスピーキングおよびライティング対策への支援の一環であるコミュニケーション能力の向上に関わる取り組みとして、利用可能な教材及びTOEFL学習者支援制度 (コミュニケーション学習を含む) の推進について提言した。 (pp. 31~32)</p> <p>日本・欧米間の異文化コミュニケーションの成功には、まず自国の文化を理解する必要があることについて、10年以上の日本での生活、および異文化コミュニケーション能力を必要とした職業体験を、3つの事例・教訓にまとめた内容であった。結論として、異文化コミュニケーションを円滑するため、自国の文化を意識しながら、相手の文化受容に臆することなく、開放的な態度で臨むことが何より重要であることを解説している。(pp. 13~18)</p>
<p>(国際学会発表)</p> <p>1. なし</p>				

<p>(国内学会発表)</p> <p>1. 「Peer Mentoring and Development of Student Agency」 (ポスター発表)</p> <p>2. 「Designing and Implementing a “Borderless” English Curriculum from the Ground Up」 (口頭発表)</p>	<p>共同</p> <p>共同</p>	<p>2019年11月2日</p> <p>2019年8月29日</p>	<p>全国語学教育学会 (JALT) 第45回国際大会 (名古屋、2019)</p> <p>大学英語教育学会 (JACET) 第58回国際大会 (名古屋、2019)</p>	<p>この研究発表では、常磐大学での複数年にわたるピアメンタリングプロジェクトの結果について発表した。過去に学生メンターが後輩学生を指導した経験を通じて、学習に関する自主性と意思決定をどのように発展させたかを調査した。 著者： 桑原秀則 (70%)、Kevin McManus (15%)、渡邊真由美 (15%)</p> <p>この研究発表では、新しく導入された共通英語カリキュラムに対する学生と教員へのアンケート結果を統計的に分析し発表した。シラバスや授業手法、教科書などについての感想や、今後の課題について報告を行った。 著者： Kevin McManus (40%)、桑原秀則 (40%)、森本俊 (10%)、坂本明彦 (10%)</p>		
<p>(演奏会・展覧会等)</p> <p>1. なし</p>						
<p>(招待講演・基調講演)</p> <p>1. 「Overcoming challenges in providing support for participants in student exchanges and other study abroad programs」 (口頭発表)</p>	<p>単著</p>	<p>2018年10月21日</p>	<p>「全国語学教育学会 (茨城部)」</p>	<p>招待講演者として、「全国語学教育学会 (茨城部)」において2時間の発表・ワークショップを担当した。内容は、研究および経験に基づいて、「私なら留学できる！留学したい！」と思う学生が増えるための教育環境作り方であった。</p>		
<p>(受賞(学術賞等))</p> <p>1. 全国語学教育学会 (JALT) 「Best of JALT」受賞</p>		<p>2018年</p>	<p>全国語学教育学会 (JALT) 第45回国際大会での表彰 (名古屋、2019)</p>	<p>個人研究合評内容による最高良い評価</p>		
<p>研 究 活 動 項 目</p>						
<p>助成を受けた研究等の名称</p>	<p>代表、分担等の別</p>	<p>種 類</p>	<p>採択年度</p>	<p>交付・受入額</p>	<p>交付・受入額</p>	<p>概 要</p>
<p>(科学研究費採択)</p> <p>1. なし</p>						

(競争的研究助成費獲得(科研費除く))						
1. なし						
(共同研究・受託研究受入れ)						
1. なし						
(奨学・指定寄付金受入れ)						
1. なし						
(学内課題研究(共同研究))						
1. 常磐大学課題研究助成 (研究名称： 「Framework of Tokiwa English Curriculum (FTEC) に基づいた共通英語教育カリキュラムの実践と検証」)	代表：桑原秀則 (常磐大学助教)	課題研究	2018-2020年度		2,797千円 (3年間)	2018年度より本学の必修英語科目(英語Ⅰ～Ⅵ)の共通化が図られるとの方針が示され、総合講座語学科目運営会議内に設置されたカリキュラム検討ワーキンググループを中心に Framework of Tokiwa English Curriculum (FTEC: エフテック) が策定された。本研究の第一の目的は、2018年度から運用が開始されるFTECの成果の検証及び改善点を検証することである。第二に、策定時に十分取り入れることができなかった学生及び企業のニーズや、先進的な他大学の取り組みを調査することで、共通英語教育の目標や内容及び運営の更なる改善を図る。以上の2点を踏まえ、FTEC Version 2を策定する。
2. 常磐大学課題研究助成 (研究名称：「ピア・メンター活動の実践と支援システム構築への取り組みー学習者要因に焦点を当ててー」)	代表：渡邊	課題研究	2018年度		981千円 (1年間)	本研究はこれまで行ってきた学生が学生をサポートするピア・メンター活動のシステムをより系統的なものとして確立するとともに、学生の英語学習者としての自律性の育成を学習者要因の観点から明らかにするものである。本研究で取り組むピア・メンター・システムは国際交流語学学習センターで提供する DropinLabとの連携を視野に入れるとともに、英語学習サポートと留学サポートへの応用を全体の構想としている。
(学内課題研究(各個研究))						
1. なし						
(知的財産(特許・実用新案等))						
1. なし						